

<目次>

<第1章>	アメリカ東部（その1、ニューイングランド地方）	3
第1項	マサチューセッツ州（州都ボストン）	11
第2項	ニューハンプシャー州（州都コンコード）	18
第3項	メイン州（州都オーガスタ）	19
第4項	バーモント州（州都モンtpリア）	22
第5項	コネチカット州（州都ハートフォード）	25
第6項	ロードアイランド州（州都プロビデンス）	26
<第2章>	アメリカ東部（その2、大西洋岸メガロポリス地帯）	29
第1項	ニューヨーク州（州都ニューヨーク）	29
第2項	ニュージャージー州（州都トレントン）	37
第3項	ペンシルバニア州（州都ハリスバーグ）	41
第4項	デラウェア州（州都ドーバー）	45
第5項	メリーランド州（州都アナポリス）	48
第6項	ワシントン特別区（Washington, District of Columbia）	52
<第3章>	アメリカ南部（その1、アパーサウス）	57
第1項	バージニア州（州都リッチモンド）	58
第2項	ケンタッキー州（州都フランクフォート）	63
第3項	ウェストバージニア州（州都チャールストン）	66
第4項	ノースカロライナ州（州都ローリー）	67
第5項	テネシー州（州都ナッシュビル）	69
第6項	サウスカロライナ州（州都コロンビア）	70
第7項	ジョージア州（州都アトランタ）	72
第8項	アーカンソー州（州都リトルロック）	78
第9項	オクラホマ州（州都オクラホマ・シティ）	79
<第4章>	アメリカ南部（その2、ローワーサウス）	82
第1項	フロリダ州（州都タラハシー）	82
第2項	アラバマ州（州都モントゴメリー）	83
第3項	ミシSSIPPI州（州都ジャクソン）	87
第4項	ルイジアナ州（州都バトンルージュ）	91
第5項	テキサス州（州都オースチン）	93

＜第5章＞	アメリカ中西部（その1、五大湖方面）	99
第1項	イリノイ州（州都スプリングフィールド）	100
第2項	ミシガン州（州都ランシング）	106
第3項	オハイオ州（州都コロンバス）	109
第4項	インディアナ州（州都インディアナポリス）	112
第5項	ウィスコンシン州（州都マディソン）	114
第6項	ミネソタ州（州都セントポール）	116
第7項	アイオワ州（州都デ・モイン）	119
＜第6章＞	アメリカ中西部（その2、グレートプレーンズ地方）	122
第1項	ミズーリ州（州都ジェファーソンシティ）	122
第2項	ネブラスカ州（州都リンカーン）	124
第3項	カンザス州（州都トピーカ）	126
第4項	サウスダコタ州（州都ピアール）	130
第5項	ノースダコタ州（州都ビスマーク）	132
＜第7章＞	アメリカ西部山岳方面	136
第1項	コロラド州（州都デンバー）	137
第2項	ワイオミング州（州都シャイアン）	142
第3項	モンタナ州（州都ヘレナ）	144
第4項	アイダホ州（州都ボイシ）	145
＜第8章＞	アメリカ西部（その1、グレートベイスン地方）	148
第1項	ネバダ州（州都カーソンシティ）	149
第2項	ユタ州（州都ソルトレークシティ）	151
＜第9章＞	アメリカ西部（その2、メキシコ国境方面）	154
第1項	ニューメキシコ州（州都サンタフェ）	154
第2項	アリゾナ州（州都フェニックス）	157
＜第10章＞	アメリカ西部（その3、太平洋岸地方）	161
第1項	カリフォルニア州（州都サクラメント）	161
第2項	オレゴン州（州都セーラム）	169
第3項	ワシントン州（州都オリンピア）	173

＜第 11 章＞ 飛び地となっているアメリカの州	177
第 1 項 アラスカ州（州都ジュノー）	177
第 2 項 ハワイ州（州都ホノルル）	181
＜第 12 章＞ 現在までのアメリカを概観する	186
＜第 13 章＞ 多様性をフルに活かす異文化連邦国家アメリカ	195
＜第 14 章＞ トランプ大統領登場以降のアメリカと世界	205
（参考資料 1）『メイフラワー号の誓約』	208
（参考資料 2）『アメリカ独立宣言』	208
（参考資料 3）イロコイ族の部族長レッドジャケットによる演説	211
（参考資料 4）リンカーンの「ゲティスバーグ演説」	213
（参考文献）	215
（参考地図 1）「アメリカ全州」	216
（参考地図 2）「東部独立 13 州」	217
（人名索引）	219

<第1章> アメリカ東部（その1、ニューイングランド地方）

【アメリカ文化の中核である合衆国東部について】

まずは、以下のアメリカ全体についての大まかな統計数字をご覧いただきたい。合衆国の人口、人口密度、最大人口都市、人種構成、ヒスパニック系の割合、アメリカ以外で生まれた住民の割合、宗教的信者の構成具合などが見て取れる。アメリカ各州の関連情報については概括的に知っておく必要があろう。このような数値を把握しておくことで各州との差異がよく把握できる(資料は基本的にアメリカ国勢調査局による)。

総人口:325,719,178 (2017 est. 米国は中国、インドの次であり、米国の次はインドネシア、ブラジルの順)、人口密度:33.5/km ² 、最大人口都市:ニューヨーク市 (次はロサンゼルス、シカゴ、ヒューストン、フェニックス、フィラデルフィア、サンアントニオの順)
白人:72.4%(英国系23.3%、ドイツ系15.2%、アイルランド系10.8%)、アフリカ系:12.6%、ヒスパニック&ラティーノ:16.3%、アジア系:4.8%(中国系1.4%)、先住民:0.9%
アメリカ以外で生まれた住民:12.9%
(宗教)プロテスタント:70.6%(福音派25.4%)、カトリック:20.8%、モルモン:1.6%、東方正教会:0.5%、他のキリスト教:0.4%、ユダヤ教:1.9%、イスラム教:0.9%、仏教:0.9%、ヒンズー教:0.7%、無宗教:3.1%、その他:15%
(使用言語) 英語(主要)、スペイン語(4,000万)、中国語(340万)、タガログ語、ベトナム語、アラビア語、フランス語、韓国語、ロシア語、ドイツ語、ハイチ語、ヒンディー語など。ハワイでは英語の他にハワイ語の語彙が使われる。

(a) 東部13州とニューイングランド

文化的伝統を規定するニューイングランド地域がアメリカ東部文化の中心的な位置を占める。ニューイングランド人は宗教的伝統をもち、質実剛健であり、知的で創意工夫に富み、タウンの政治に積極的に参加した。ニューイングランドの核は1643年から1683年まで結成されていた「ニューイングランド連合」である。マサチューセッツ湾植民地、プリマス植民地、コネチカット植民地、ニューヘイヴン植民地が結束して英国にもの申したり、団結して先住民と戦闘したり、フランス軍やオランダ軍に対抗したりする先例を作っている。こういう経過があって、いつしか東部13州¹が集まり、1776年に英国からの独立

¹ 独立東部13州とは、マサチューセッツ、ニューハンプシャー、ロードアイランド、コネチカット、ニューヨーク、ニュージャージー、ペンシルバニア、デラウェア、メリーランド、バージニア、ノースカロライナ、ジョージアの各州であり、東部だけでなく実際には南部諸州も入っている。

4 <民・魂・音> から見たアメリカ

宣言を發布した。「英米戦争」が起こる1812年頃までには、ニューイングランド地域では産業革命的な動きがすでに起こっていた。英国との戦争によって製品が輸入されなくなったことで、自前で必要なものを作ろうという自立性や進取性が触発され、またそれを可能にさせる周囲の条件も整っていた。

マサチューセッツ州生まれでエール大学卒のイーライ・ホイットニー(1765-1825)による綿繰機の発明は、そういったニューイングランド人の文化的進取性の1つの証拠である。ニューイングランドの自立性と政治的参加意識が、次第に周囲の州へと波及していく。ただ宗教的不寛容性もあったので、一部に不協和音が生じた。ピューリタニズムの牙城としてのハーバード大学ができる1630年代は、そうした不寛容への抵抗が見られた時代である。例えば、ロジャー・ウィリアムズ(1603-83)はアメリカ先住民にたいする公正な対応や政教分離の原則などを主張したが、マサチューセッツ植民地側に追放されてしまう。ウィリアムズがマサチューセッツを離れて作ったタウンがプロビデンスであり、それがロードアイランドの原点となった。アン・ハチンソン(1591-1643)という信心深い女性が女性聖職者についての独自の意見をもった結果、宗教裁判を受けてロードアイランドのボーツマスに逃れている。ニューイングランドも一様ではないのである。英国がこの州に特許状を与えたのは17世紀後半に入ってからのことだ。

クエーカーという異端的キリスト教も東部の一環であるペンシルバニアに入っている。1681年にウィリアム・ペンの父親が英国王チャールズ2世から現在のペンシルバニアの土地を下付されたことによって、ペンはその地にクエーカー教の新天地を創造しようとした。ペンシルバニアのペンとはウィリアム・ペンから取った言葉だが、こうした多くの異端的宗教信者のアメリカ東部への植民も東部文化の多様性を強化してきた要因の1つである。

(植民地の発展成立順)

- 1 バージニア(1607):自治植民地。1624年、王領植民地に。
- 2 プリマス(1620):宗教的契約植民地。1691年、マサチューセッツに。
- 3 マサチューセッツ(1629):自治植民地。1684年、王領植民地に。
- 4 ニューハンプシャー(1629):領主植民地。1680年、王領植民地に。
- 5 メリーランド(1634):領主植民地(王領植民地時代あり)。
- 6 プロビデンス(1636):宗教的契約植民地。1643年、ロードアイランドに。
- 7 ニューヘイヴン(1637):宗教的契約植民地。1664年、コネチカットに。
- 8 コネチカット(1639):宗教的契約植民地。1662年、自治植民地に。
- 9 ロードアイランド(1643):自治植民地。
- 10 カロライナ(1663):領主植民地。1712年、南北カロライナに。
- 11 ニューヨーク(1664):領主植民地。1685年、王領植民地に。

- 12 ニュージャージー (1664) : 領主植民地。1702年、王領植民地に。
- 13 ペンシルバニア (1681) : 領主植民地。
- 14 デラウェア (1704) : 自治植民地。1682年から1704年まではPA領。
- 15 ジョージア (1732) : 自治植民地。1752、王領植民地に。

15の植民地があるが、それらは最終的に13に収斂していく。その植民地が自治であっても、またその植民地が王領であったとしても、英国王の特許状が必要であった。上記の英国領から発した北米植民地の中で、プリマス、ニューヘイヴン、プロビデンス、マサチューセッツ、ニューハンプシャー、コネチカット、ロードアイランドといった7つのコロニーがニューイングランド植民地である。中部域の植民地はニューヨーク、ニュージャージー、ペンシルバニア、デラウェアの4コロニーである。南部植民地は、メリーランド、バージニア、カロライナ、ジョージアの5つである。宗教的な契約と誓約に基づく初期の植民地は次第に自治植民地に変化し、次第に英国に認められて特許状を下付されていく。また本国の17世紀は清教徒革命の時代であるから革命を経験する度合いに相応してニューイングランド植民地に特許状が与えられるという背景もある。上記15コロニーを見て分かるように、初期の植民地は他の有力な植民地に統合される方向を歩んでいる。これは宗教誓約から経済契約へという、人間的といえなくもないような方向である。近年のアメリカ研究は、欧州とのさまざまな関連を研究のバックボーンの一つにして、今まで軽視されてきた先住民研究やアフリカ系アメリカ人研究、あるいはアメリカ中部・南部研究といった多元的方法論を重視するものが出始めている。つまりアメリカ成立の基盤としてのニューイングランド研究の位置づけが相対化されているということだ。南北戦争ではマサチューセッツとバージニアは敵同士になる。いずれのときに味方で、どういう時に敵になるのか。それは南北の州の100年後の産業構造の違い(北は工業・貿易、南は農業プランテーション)と富の不均衡、西部開拓に際して自由に土地を開拓して保持できるという北部の考え方(Cf. 1862年の「自作農地法」)、工業経済優先政策にたいする南部プランターの反対、1863年に北部から宣言される「奴隷解放」という表向きの理念、などの事情があった。奴隷制度は論外の非人間的制度だが、南部の農業諸州は本国英国から持ち込んできた貴族的・王族的・階級的意識をもって、彼らとしては誇り高く奴隷を使っていたつもりだったであろう。フランス革命の「自由・平等・幸福の追求」の理念はその裏で無慈悲な経済合理性の追求を支えており、人類が永く親しんできた古典ギリシャ的南部の農業社会の社会構造を許すことはなかった。南北戦争はアメリカ独立戦争とは根本的に意味が異なっていた。南北戦争は、

世界史において「新参者の」科学理性を介在させた産業資本社会の介入を含めた、アングロサクソン文化間のアメリカにおける富の獲得合戦である。18世紀に英国がインド等の地域で行ったことを、19世紀にアメリカ人に「変身」した英国人が、産業革命と同時期のアメリカ大陸で行ったのだ。

やや皮肉な物言いをすると、奴隷解放や人権意識への北部の姿勢は、実質的な富の奪い合いを外から可視化させるためであったともいえる。裏の行為をカモフラージュさせるためのトリックなのだ。欧州からの文化の流れを大括りに言わせてもらえば、アメリカの歴史は、ゲルマン系アングロサクソンの理性（目的追求型言語の認識基盤）が、まずはフランク王国を形成してギリシャ・ラテンを駆逐し、ケルト系文化を欧州大陸陸やブリテン島において無力化させ、同一文化内では清教徒革命を起こして共和国を建設し、プロテストする精神を自国民に涵養した。次の段階は、英国から清教徒たちを新大陸アメリカに植民させ、勢力を誇っていたラテン文明、つまりスペインの後にやってきたフランスをルイジアナ購入によって新大陸から引き上げさせ、体裁だけ欲に目が眩んだ英米戦争を18世紀初期に起こし、中盤になると同族同士の富の奪い合い、すなわち南北戦争を植民地内部の白人同士で遂行し国内のガラガラポンをやったのである。こうしてアメリカ内部が統一されると、もうインドなど他の植民地で十分栄養を吸い込めた英国本国はこんなところで手打ちにしておこうということで新大陸の大部分から手を引き、100年経過して英国が成長を終え、老境に入った時期に、目を細めて見られるようになってきた息子のアメリカに世界の覇権を渡してもよいと判断したわけである。こうして日本や中国を睨んだ太平洋西漸方針の下での連邦共和国アメリカとしてのアイデンティティが完成した。すべて1776年から、いや1620年から「誓約」されていたことなのだ。現在のピューリタンの連邦共和国はあの41名が誓ったメイフラワーの誓約に遠源をもつといえよう。

(b) アメリカ的精神の土台

アメリカ研究者高木八尺は、1924年から1950年まで東京大学法学部でアメリカ憲法、アメリカ史とアメリカ外交史を講義した。彼にはアメリカ論を講じながら、第2次大戦中には教え子をアメリカ軍と戦闘を交える前線に送らなければならなかったという苦い体験がある。アメリカ特有の精神を知るには、英国系の移住民の文化的背景とアメリカ新大陸での生活体験、ならびにピューリタニズムという概念を考える必要があると高木は述べている。以下はそうした言説の引用である。

ピューリタニズムという語を私はきわめて広義に（けっして一宗一派の名称として局限せずに）精神的な世界観、理想主義的な人生哲学というような意味をもたせて使うのである。ピューリタンは